

博士論文要旨

重症心身障害児者施設の歴史的背景と看護のありよう ——くらしの中で福祉職と協働する看護の再定義——

立命館大学大学院先端総合学術研究科
先端総合学術専攻一貫制博士課程
クボタ ヨシエ
窪田 好恵

重症心身障害児者（重症児者）施設は、重症心身障害のある児童が入所する施設として1967年に医療法と児童福祉法により法制化された。しかし、重症児者施設では半世紀にわたって絶えず看護師不足が続いてきた。就職を希望する看護師が少ないうえに就職してもすぐに辞める看護師が多い。一方で重症児者看護にこだわりをもち、数十年にわたって勤務を継続している看護師がいる。本研究の問いは、看護師にとって重症児者施設で働くとはどのようなことであるか、なぜ重症児者施設を選択し、なぜ仕事を続けてこられたのか、またすぐに辞めていく看護師との差異は何であるかということである。

研究方法は、重症児者施設に1年から41年間の勤務した看護師16名へのインタビュー調査を行い、語りを帰納的にカテゴリー化した。その結果11の要素が抽出された。11の要素とは、「職場選択の経緯と理由」「社会／法の変遷」「組織体制/職場文化との関係」「重症児者との関係」「親との関係」「他職種との関係」「看護師同士の関係」「看護実践」「倫理的ジレンマ」「自己肯定感」「使命感」である。また、その要素は、重症児者施設の歴史と法の変遷を併せて分析することで3つの世代に区分された。

さらに、分析により次の2点が明らかになった。1点目は、看護師の重症児者施設選択の決め手は、重症児者との接点だということである。2点目は、重症児者施設で勤務する看護師の就労継続の決め手となるものは、キャリアのある時点で福祉職と協働する〈くらしの中の看護の再定義〉がおきることである。

各世代の看護師の〈くらしの中の看護の再定義〉のおき方は、次のような特徴があった。第一世代の看護師の時代は、入所者全員が小児であった。看護師たちは保育士らと一緒に試行錯誤で療育を創ってきた時代において、職種による境界のない援助が楽しく「これでいい」と感じている。その看護は、医学モデルから独立しようとして提唱された看護理論で定義されているところの看護の本質そのものであった。第二世代の看護師の時代は、入所者の年齢が成人に達するようになり、障害の程度も重度化した。この世代の看護師は、くらしの中にロールモデルの存在があり、第一世代の看護師と同様に〈くらしの中の看護の再定義〉が容易におきていた。また、看護師たちは、「看護は生活の支援」であり、福祉職と協働するのが当たり前という明確な看護観をもっていた。

一方、第三世代の看護師の時代になると、入所者が高齢化し、障害はより重度になった。また、診療報酬の改定により看護師数が多くなってきた。この時期に就職した看護師は、「くらしの中の医療の拡大」により、看護の再定義はおきにくくなっていた。それは、職場環境の適応が困難なことから自己肯定感が低下しているためであった。しかし、新人看護師たちには、重症児者看護の基盤である、「くらしの中の看護が好き」であり、「重症児者への愛情」や「使命感」がある。そのため、先輩看護師や上司の支えにより「看護の再定義」はおきると考えられる。〈くらしの中の看護の再定義〉がおきれば仕事を継続でき、おきなければ離職に至るということがわかった。

これまで重症児者看護の本質にかかわるものや重症児者看護の専門性に関する研究は行われてこなかった。本研究で得られたデータは、数少ない重症児者看護の実践者の語りとして重要なデータである。本研究は、こうした貴重なデータに基づいて、これまで言語化されてこなかった重症児者看護について言語化したことに研究史上の意義がある。また、実践上の意義として3点挙げられる。1点目は、重症児者施設における看護師の人材確保と看護の質の向上につなげることができる。2点目は、多職種連携のあり方に示唆を与える。3点目は、超重症児・準超重症児が増加している現在、重症児者看護を施設内で継承することはもちろん、地域でくらす重症児者看護にも生かすことができるという意義がある。